



Title	青年団リーダーの自己形成を分析するー視角
Author(s)	大坂, 祐二
Citation	社会教育研究, 11, 35-42
Issue Date	1991-09
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/28481">http://hdl.handle.net/2115/28481</a>
Type	bulletin (article)
File Information	11_P35-42.pdf



[Instructions for use](#)

# 青年団リーダーの自己形成を分析する一視角

大坂 祐二

## 1. はじめに

本稿では、青年団のリーダーの自己形成過程を分析する視角について、特に青年団の地域づくり活動を念頭において、若干の論点整理を試みる。

これまで、青年団の活動家(ないしリーダー)<sup>(1)</sup>の自己形成を分析する視角は、基本的には、自分と仲間に対する見通しと地域に対する見通しをいかに重ね合わせているかというところにあったと言ってよいだろう。例えば、笹川孝一氏は、実践の構造に対応する対象認識・なかま認識・自己認識と世界観・歴史観・人生観、および両者の関係がどう変化するかを活動家の自己形成分析の視角として提起した<sup>(2)</sup>。そして、青年団活動における実践の「対象」が地域の課題にあることは、青年団の役割が「自己形成、地域改革、平和と民主主義を守ること」にあるとされていることから、共通に理解されうるだろう。

しかし、例えば日本青少年研究所所長である千石保氏は、今日の青年団について次のように述べている。「それにしても、現代社会の矛盾を明らかにして、社会変革をしなければならない、という青年団の目的は明確でない。さまざまな悩みを持っているのに、表面だけ冗談をいい合っている、そういうことが矛盾なのか、核兵器があることが矛盾なのか明確でない。」豊かになって目的や目標を失った社会で、若者たちは何かの目的のために耐えることを嫌う。そのことのために時間を割き、そのことのために他人と接触を持つことを嫌う。現代の若者に青年団の反核運動、平和運動、男女平等運動などはなじみにくい。また、「青年の一人ひとりの願いや要求が団活動に生かされねばならない。その願いや要求は地域の問題を解決しないと実現できない」との主張もいま一つはっきりしない、と<sup>(3)</sup>。

千石氏の所説については、最近の青年論、若者論と併せて、いずれまとまった検討をしたいと考えているが<sup>(4)</sup>、やはりいくつかの疑問を持たざるを得ない。たとえば、平和運動など「インストルメンタル (instrumental) な過程を経てかちとられる」感動<sup>(5)</sup>を、本当に現代の若者は好まないのだろうか。なるほど、青年団の平和運動や高校生の平和ゼミナールなどは「現代の若者」の中では多数派ではないかも知れない。では社会の役にたちたいと「新・新宗教」「霊能力」にのめりこむ若者や、自分を変えたい、自分の話を真剣に聞いてくれる仲間がほしいと「自己開発セミナー」に大枚を使う若者<sup>(6)</sup>が、よりコンサマトリー (consummatory) で現代的な若者の姿なのだろうか。反核・平和運動とは異なるが、高校生のロックフェスティバルのために1年がかりで準備に当たる高校生ス

スタッフの得る感動は「インスツルメンタルな過程を経てかちとられる」感動とは違うのだろうか。

一方、「青年の一人ひとりの願いや要求が団活動に生かされ」るよう、「来たいときに来て、やりたいことをやる。拘束するよりも自主的に参加する方が青年団らしい」「決まったことをやるのではなく、やりたいことを自分で決めていく」という徳山市連合青年団のような「自由参加型」青年団<sup>(7)</sup>がうまれていることを、きちんと評価しなければならないだろう。

しかし他方、長野県飯田市竜丘青年会の青研集会では、レポートのテーマを「自由で好きなように話ができることを重点に」していたところから、「自分の生活を皆にわかってもらい、そこからでくる悩みや問題」を綴ることに力点を置くことで、深い話し合いができたという経験が生まれている<sup>(8)</sup>。「青年の願いや要求は地域の問題を解決しないと実現できない」との主張（より正確には、青年一人ひとりの要求は仲間の要求とつきあわせることで、より広い視野から位置づけられ、自分たちの願いとその実現をはばむ条件を客観的に確かめることができる、そのことが地域問題の解決に向かわせる、というべきであろう）がはっきりしないとすれば、飯田市のような例に学びながら、青年の要求と地域の問題の関わりについて視点を深めてゆくことが求められているであろう。本稿ではこの青年の要求と地域問題の関わりという問題関心から、リーダーの自己形成の問題に迫りたい。

## 2. 地域づくり活動とイベント主義の克服

### (1) 地域づくり活動の蓄積とイベント主義

80年代後半以降、「産業構造調整」下にあつて、また長時間・過密労働の下で、あるいは「コメ市場開放論」の中で、確かに地域に対する見通しを描くことは困難になっている。「青年の願いや要求は地域の問題を解決しないと実現できない」との主張が青年にとって「はっきりしない」要因のひとつが、ここに求められるだろう。

では青年団や青年教育の実践・研究において、地域に対する見通しはどのように深められてきただろう。

『青年団論』の著者であり「生活史学習」の提唱者である那須野隆一氏は、すでに1982年に「生活史学習の反省」として、生活史学習が地域問題にかんする学習内容を組みこんでいくこと、青年が学習を通じて地域社会・地域問題を意図的に学びとる必要があることをあげていた<sup>(9)</sup>。また斎藤秀平氏も、那須野氏の『青年団論』には青年が具体的に働きかけるべき家族や職場を含みこんだ地域が据えられている一方、青年が切り結ぶべき切実な生活課題や地域課題はそれぞれ青年自身が探求すべき課題として残されていると指摘した<sup>(10)</sup>。

青年自身による探求は、ひとつには地域づくり活動としてすすめられている。例えばこの10年間、全国青年問題研究集会で参加者の多かった分科会は表のように推移している。地域づくり分科会の

順位が年々上がっており、地域づくり活動への関心が高まっていることがわかるだろう。

また活動の内容や方法においても、平和問題、環境問題、婦人問題など個別の課題から、地域づくりを正面から意識した取り組みへ<sup>(11)</sup>、身近な問題の話しあいから調査活動へといった広まりと深まりがみられる。

その一方で見落としてはならないのは、地域づくり活動を含む青年団活動にみられるイベント主義的傾向である。先の千石氏が「差異性こそ青年団のアイデンティティであり」、「差異はイベントとなじむ<sup>(12)</sup>」としていたのに対して、那須野氏は「近年の青年団活動はイベントをやりにすぎている」「無策のままイベントにとびつくー無為無策のイベント、それを私はイベント主義と呼ぶーのである」が、内容のない形態だけの活動ではイベントは成功しても青年団は消滅すると主張している<sup>(13)</sup>。実際、第35回全国青研の「イベントの取り組み」分科会では、「イベントが組織強化・拡大につながらず、かえって団員の減少がすすんでいる」という問題が出されていたという<sup>(14)</sup>。団員減少が問題なのかどうかは議論のあるところだが、このイベント主義的傾向を克服することなしには、地域づくり活動における広まりと深まりの蓄積を生かすことはできないだろう。

## (2) 青年団のイベントと地域

ここで事例として北海道K町青年団の青年祭のとりくみを見てみよう。舞台発表や意見発表を中心とする青年祭（青年大会、文化祭など）は、それ自体はどこでもおこなわれており特別なイベントではない。また地域づくり活動としてよりも、文化活動として性格づけられるものである。しかし、地域の生活課題を創作演劇にしたり、青年の活動を知ってもらおうと町民に働きかけるなど、地域づくり活動として、あるいは地域づくりへ広がってゆくきっかけとして大いに可能性をもっている。ただし活動が停滞している中で、青年団のPRをしたい、何かやらなければとの思いからイ

表 全国青研での参加者数上位の分科会

年次	分科会	参加者数
第26回 1981年 539名	①行事のあり方、考え方	43
	②女子活動	34
	③学習活動	32
	④活動家養成	29
	⑤教宣活動	27
第30回 1985年 475名	①青年団と生きがい	70
	②組織の活性化	51
	③女子活動	44
	④住みよい地域づくりと青年団	41
	⑤平和運動	36
第34回 1989年 416名	①組織強化・拡大	51
	②青年団活動と生きがい	36
	③住みよい地域づくり	25
	④女子活動	21
	⑤上演・上映・鑑賞活動	17
第35回 1990年 402名	①地域づくり	34
	②組織強化・拡大	32
	③青年期と生きがい	31
	③青年期の成長と青年団活動	31
	⑤イベントの取り組み	28
	⑤女子活動	28

- 1) 年次の下は参加総数
- 2) 分科会名は一部省略してある
- 3) 参加者数はオブザーバーを除くレポート数

ベント的にも取り組まれやすい行事であろう。

K町青年団の青年祭は、1990年度の年度始総会議案書には「会員相互の可能性を発揮し、単位会の個性を生かし、町民に自分達をアピールする場とし、K青協最大のイベントとする。」と事業の目的がうたわれている。青年祭実行委員会が各単位会から委員を出して結成され、農作業も一段落した11月に開かれる。内容はゲームやバンド演奏を中心にした前夜祭と、意見発表、舞台発表、展示である。

公民館の入口に大きなゲートを作り、講堂いっぱい椅子が並べられた。しかし、いざフタを開けてみると、会場はさっぱり埋まらないのである。裏方と出演者以外の手の空いている会員が観客になっているほかは、青年団OBが何人か来ているだけ。意見発表のとき発表者の家族が何人か来ていたが、自分の息子の出番が終わったら帰ってしまったようだ。

発表や展示それ自体は、文字通り個々の会員や単位会の個性が発揮され、決して見劣りするものではなかった。中にはたいへん優れたものもあり、ある単位会の演劇は上部団体の大会や町の公民館まつりでも再演され好評だった。また、町の特別養護老人ホームに勤める青年は、意見発表「私にとって福祉とは」で今年の全国青年大会に出場することになった。K町青年団じたい、日青協(日本青年団協議会)の機関紙『日本青年団新聞』で紹介されたこともある、道内でも活発な青年団のひとつである。それだけに、傍からみているとなぜ?との思いが強い。

当日のパンフレットを見ると、実施方針として次の5点があげられている。

- 1) この青年祭は、芸術、文化的の発表の場であるとともに、各単位会及び会員の交流を深める場とする。
- 2) 様々な分野に取り組むことにより、新たな自分を発見してもらう。
- 3) 各単位会会員の個性を踏まえ、単位会として特色ある発表の場とする。
- 4) 自らが楽しむことにより、祭全体を盛り上げていきたい。
- 5) 北青協の予選会を兼ねる事により、発表内容の充実を計り、造りあげる喜びと感動を知ってもらう。(原文のまま、「北青協」は郡市レベルの上部団体)

これで見ると、年度始総会議案書にあった「町民に自分達をアピールする場」との位置づけがないことになる。その辺りを実行委員長に聞いてみた。実行委員会で青年祭を楽しくするにはどうするか議論した中で、「原点に戻って、人に見せるのか、自分たちで楽しむのかを話した。人に見せるにはピラをまいたりしなきゃいけないが、いままでなかなか人が集まらなかった。それではやっている方もやりがいがいい。それなら仲間同志で見合って、競っていったらどうだということにまとまっちゃった」のだという。これまでの青年祭でも、全戸訪問したり地元の新聞に告知を出すなどPRには努めてきたが思うような成果がなく、町民に働きかけをするのかしないのか、例年のように議論となっていた。が、結局その年の実行委員長の判断に任せられてしまうことが多く、今回も町内に数カ所ポスターをはっただけで、あとは「自分たちで楽しもう」ということになったのだ。

なるほど、お客さんをたくさん呼んで楽しんでもらおうと思えば、内容的にもそれなりの準備が必要だ。そうではなく、自分たちで楽しむということなら宣伝の手間も要らないし、多少は気が楽かも知れない。しかし上部大会への「予選会を兼ねる事により、発表内容の充実を」はかることができるなら、やはり多くの人に見てもらった方がよいだろう。なによりも、せっかく忙しい時間を割いて練習した舞台なのに、観客がいなければそれこそ「やりがいがない」のではないか。この年の青年祭のおよそ1カ月後に団員を対象に行ったアンケートでは、「青年祭はもっと町の一般の人たちに見てほしい」という意見について27.1%が「まあそう思う」、64.3%が「全くそう思う」と答え、団員の9割以上が青年祭を町の人たちに見てほしいと望んでいることがわかった。

では、実際に出し物を考える各単位会では、青年祭はこんなふうにしてほしい、俺たちはこんな芝居をやるからぜひ町の人を呼んでほしいといった議論はないのだろうか。「単位会ではそういう話をしない。演劇でも、脚本を書く人にまかせてしまう。練らないままだから、演出も照明も出演者もすべて困ったまま。それをどうしようという危機感がまずなかった。それは今年で言えば、忙しくて集まる機会が少なかった。」(実行委員長)

道東の畑作地帯にあるK町ではこの年の秋、長雨に見舞われ、農作業がずっと遅れていただけでなく、雨で玉ねぎが腐りはじめるなど相当の被害が出た。ある単位会ではこの被害のために会員の多くが早々とアルバイトに出てしまい、青年祭の準備が余りできなかったという。そのような状況であったとはいえ、否むしろこのような状況であればそれだけ、実行委員会や各単位会でどのように青年祭に取り組むか話し合う必要があるように思われてならない。町役場に勤めるある青年は、単位会での青年祭の取り組みについて「青年祭がある、何か出さなきゃ、これやろう、覚えたか、となる。なぜ青年祭ってやるのというところから始まっていない。消化型を抜け切れてない。」と語っていた。

この事例が教えてくれることのひとつは、青年団が働きかける対象としての地域をどう見るかということであろう。まず自分たちが楽しみたいということであれば、足を棒にしてのピラマキはしなくてもいいかも知れない。しかし、それで観客が少なければ自分たちの楽しみも半減してしまうことになる。地域の人たちを巻き込んで、地域を舞台にしてこそ青年たちの活動はいきいきしてくるのではないか。一方、それぞれの単位会に、集落に、家に帰れば地域は——特に農村地域は——まずなによりも生産・労働と生活の舞台である。この兼ねあいを、いいかえれば地域と青年団活動の関わりをどう考え、具体的な活動の中でどう解決してゆくかが、リーダーにとって問われているだろう。

活動の展開をこのように考えてゆくと、単位会レベルでの活動をていねいに組み立ててゆくことが必要であると思われる。この点が青年祭の事例からの教訓のふたつめである。かつて笹川孝一氏は「青年団活動における地域づくり活動の展開」<sup>(15)</sup> についての今後の課題について述べる中で、「青年団活動全体のていねいな組み立てを」として、平和で民主的でゆたかな地域をつくるという視点

をくりかえし学習し徹底するには、「青年団における青年の成長をどう実現するかという課題を、積極的に考え、位置づけねばなりません」としていた。単位会レベルの活動においても、ひとつひとつの行事にどのように取り組むか、取り組みを通じて何を達成することができたか、一人ひとりが確かめるような活動の組み立てが必要であると思われる。

### 3. ネットワークと地縁集団

では、こうした活動をすすめてゆくリーダー像およびその形成過程とはどのようなものであろうか。ところで、先の千石氏は現代の青年にとっては「ゆるやかな組織」がなじみやすいとし、徳山市の青年団も「自由参加型」であった。こうした「ねばならぬ式」「ピラミッド型」ではない、いわば「ネットワーク型」の組織では、「トリックスター型」あるいは「道化型」のリーダーがもためられていると言われている。小松光一氏によれば、「ここではより深く見通せて、役に立ち、仲間を沢山ひきつけてうまくやれる人間だけがリーダーシップを発揮することになる。」<sup>(16)</sup>また、こうした地域に住んでいる若者どうしの結節点を広げていくような活動では、「それぞれの結節点におけるにない手が、地域と自らの人生に対しての見通しをそれなりに自立的にはっきりさせ、しかもコミュニケーションを大切にす行動のしかたをよくわきまえている、という意味でのネットワークが育っているという内実が必要とされるだろう」<sup>(17)</sup>としている。

ネットワーク型の組織とリーダーを強調する青年活動論はほかにも散見されるが、組織をネットワーク型にすることよりも、「ねばならぬ式」の活動をどのように克服するか、どのように青年一人ひとりのねがいや要求を大切にすか、その結果としてのネットワークと考えるべきであろう。

ここで小松氏の所論について見落としてはならないのは、ネットワークが「地域と自らの人生に対しての見通しをそれなりに自立的にはっきりさせ」るにはどうしたらよいか、直接にはふれられていないものの、「情報型ネットワークの方法は、日本における、伝統的なそれゆえ根のある地縁集団とのリンクのなかでこそ、そのちからを発揮していこう」<sup>(18)</sup>としていることである。

ここで地縁集団は「たんねんな人間関係づくりが民主主義的に形成される」場であり、「くらしの最初の連帯」の場である<sup>(19)</sup>。青年の自立と連帯を支え、地域と自らの人生に対して見通しを持つことを支えるのは、こうした場であるに違いない。

前節で見た地域と青年団活動の関わりとを重ね合わせるなら、情報型・知縁型ネットワークと地縁集団のリンクのなかで多面的に地域を見ることのできる、地域と自己の見通しを豊かに描くことのできるリーダーが育つものと思われる。

#### 4. 今後の課題

以上の議論でもまだ不十分なところが多いが、地域づくり活動をすすめてゆくリーダー像とその形成過程を明らかにするには、なおいくつかの課題がある。

ひとつには、これまで繰り返し強調されてきたことであるが、青年にとっての要求がいかに青年にとっての必要に高められるかということがある。特に今日、虚像としての青年観<sup>(20)</sup>や氾濫する、しかし片寄った情報などによって、青年の要求は個人的、個別的なものに押し込められやすい。そのなかで、青年一人ひとりの願いや要求を仲間のなかで位置づけてゆくものとして、たまり場学習や生活史学習といった方法は今日でも重要であるし、こうした学習を通じて青年の要求をはばむものを青年自身が明らかにしてゆくことに近づいてゆけるだろう。

仲間のなかで確かめられた青年の要求が、しかし地域づくりに向かうには、他世代・他階層との交流のなかで地域の要求としてまとめられる必要がある。この点では青年が要求の実現をはばむものを取り除き、「たんねんな人間関係」をつくる場をいかにもっているかが明らかにされなければならない。

こうして、青年が自分や仲間の要求を広い視野から位置づけ、地域の課題を知る場、地域のさまざまな人々と協力・共同しながら地域の課題に取り組む場が、どれだけ青年のまわりに用意され、また作り出すことができるか、いわば青年の地域活動の構造が全体として明らかにされる必要がある。そのうえで、それぞれのリーダーがこの構造のなかでどのような実践にかかわり、地域をどのようにとらえ、どのようなリーダーとして育てているか明らかにできるだろう。

先のK町青年団にしても、『日本青年団新聞』紙上では「ひとりの夢をみんなでよってたかってプロモート、最後は誰れが言いだしつべかわからなくなってる。」と、ネットワーク型の側面が強調されている。しかし、やや立ち入ってみると、単位会、実行委員会、広報活動、4Hクラブ、公民館などで開かれる講座、他団体との連携、有志のボランティア活動など多様な活動が存在し、それらが全体としてK町青年団の活発な活動とリーダーの成長を支えていると思われる。今後はこうした具体的な地域活動の構造を解明することを通じて、リーダーの自己形成過程の分析に迫りたいと考える。

#### 注記

- (1) 青年団運動では、ごく少数の選ばれた人やすべての面ですぐれた人が青年団を動かすのではなく、様々な能力を持つ、様々なタイプの、やる気のある者が団を動かしているという意味で、指導者やリーダーではなく、活動家という用語がおもに使われている。しかしここでは、共同学習運動の問題点として指導の欠落が指摘されていたことなどを念頭において、さしあたりは



- 「リーダー」をおもに使うことにする。
- (2) 笹川孝一『『成人の発達』分析のための作業仮説』、『日本社会教育学会紀要』17号, 1981年
  - (3) 千石保『「まじめ」の崩壊』, サイマル出版会, 1991年, pp.137~147
  - (4) 千石保「理想より違い, 役立つことよりアイデンティティ」(日本青年館『青年(The Seinen)』1988年12月号)と那須野隆一「スピリットのないスタイルだけの活動は青年期にそぐわない?」(同誌1990年7月号)も参照されたい。
  - (5) 千石, 注3前掲書, p.140
  - (6) 柿田睦夫・藤田文『霊・超能力と自己啓発』, 新日本出版社, 1991年
  - (7) 日本青年団協議会『日本青年団新聞』1990年12月1日付
  - (8) 第35回全国青年問題研究集会報告書, 日本青年団協議会, 1990年, p.52
  - (9) 那須野隆一「都市青年の組織化問題」, 青年団研究所『はばたけ青年団』, 日本青年団協議会, 1982年
  - (10) 斎藤秀平「青年論」, 小川・柿沼編『戦後日本の教育理論』(上), ミネルヴァ書房, 1985年
  - (11) 笹川孝一「青年団活動における地域づくり活動の展開」, 青年団研究所編『地域にねがす青年たち』, 日本青年団協議会, 1983年
  - (12) 注4, 千石論文
  - (13) 注4, 那須野論文
  - (14) 注8前掲書, p.26
  - (15) 笹川, 注11前掲論文
  - (16) 小松光一『ヒト, ムラ, マツリの地域論』, 二期出版, 1989年, p.172
  - (17) 同「国際化, 情報化時代の青年運動」, 青年団研究所編『ネットワーク時代の青年と地域づくり』, 日本青年館, 1990年
  - (18) 同上
  - (19) 小松, 注16前掲書, p.47, 57
  - (20) 高垣忠一郎「今日の青年の自己形成について」, 日本科学者会議『日本の科学者』24(1), 水曜社, 1989年